

ヴィシー時代の青年運動——青年錬成所について——

渡 辺 和 行

はじめに

一 「ひよわで自堕落な青年」

二 複数の青年運動

三 青年錬成所

1 青年錬成所の誕生

2 青年錬成所の歴史

3 青年錬成所の機構

4 青年錬成所の理想と現実

5 ヴィシーとレジスタンスのはざままで

6 青年錬成所の終末

むすび

はじめに

一九四〇年七月に成立したヴィシー政府は、「労働・家族・祖国」のスローガンに象徴される国民革命を掲げた。国民革命の精神は青年運動をつうじて注入された。四〇年七月に設置された「家族・青少年庁」に、政府の意気込みを窺うことができる。ジョルジュ・ラミラン青少年庁長官は、「青年、それは国民革命の真の推進者だ」と位置づけ、同庁情宣部長のジョルジュ・ペロルソンも、青年は「新しいフランスの職人 (les artisans) である」と、伝統社会を想起させる「職人」の比喩を用いて訴えた。一九四〇年一月二十九日に青少年庁が地方支部ごとに開いた青年演劇祭で、ラミランはトゥルーズで、ポール・ボードゥアン総理府長官はリヨンの労働取引所で挨拶をし、ペタン元帥はラジオから青年に呼びかけた。ペタンは、家族と労働と祖国を破壊する個人主義を一掃し、「仲間精神」(esprit d'équipe) を養い、共同で働くことを述べた。

また、青少年庁の情宣部が発行した一九四二年のリーフレットには、ペタン元帥とラミラン青少年庁長官が並ぶ写真と農作業や鍛冶仕事や料理を学ぶ青年男女の写真を載せて、一七〜二二歳のフランス人の青年に「青年作業場」(les ateliers de Jeunesse) や「青年農村センター」(les centres ruraux de Jeunesse) での半年間の勤労を呼びかけていた。ジャーナリストのアルフレッド・ファーブルリュスは、フランス人捕虜の力を一部借りた「一九四〇年の収穫」(ヴィシー政府の大臣となるブノワ・メシヤンの本の題名) は、仏独協力のシンボルとなったが、一部青年の力によってなされた「一九四一年の収穫」は、新しい国民共同体のシンボルだと語った。ここにも、青年層の農作業への動員を窺うことができる。

このようにヴィシー政府は、青年に大いなる関心を表明した政体であった。国民革命の達成のために、青年のエネルギーを動員しようとした。青年にフランス再興の望みが託された。なぜなら、青年は「フランスの未来を代表する」（ペタン）からである。青年は若さや生命力にあふれた春を表象した。ヴィシー派にとって唾棄すべき第三共和政は、老人支配（Gérontocratie）の国であった。それは、退嬰主義（immobilisme）やデカダンスが似合う国であった。つまり、フランスの復活や回春のシンボルとして、青年が動員されたのである。「新秩序」を創出する実働部隊、「新秩序」の奉仕者としての役割が青年に期待された。ヴィシーの青少年対策は、国民革命と不即不離の関係にあったのである。

青年の教化組織として一九四〇年七月に、「フランスの仲間」（Compagnons de France）と「青年錬成所」（Chantiers de la Jeunesse）が設けられた。その目的は、祖国の崇拜と勤労の義務を教えること、すなわち、精神を柔弱にする主知主義にピリオドを打ち、手仕事を賛美し、スポーツをつうじて明るい目とたくましい筋骨を持った健全な青少年を育成するというものであった。青年運動の指導者には、ペタン元帥に熱狂的なカトリック教徒や軍人が多かったが、なかには聖職者もいた。カトリック系スカウト運動のリーダーが、伝統的価値を教えこもうとしたのである。かくして、ヴィシー政府の青年への眼差しの増大と、青年運動の指導者の思惑とが交差する。指導者たちは、国民革命に奉仕することと教会の要求を満たすことに集中した。

隣国ナチス・ドイツでも、ヒトラー・ユーゲントが疑似革命性の中心となっていたことは周知の事実であった。一九三三年にナチス・ドイツを訪れていたフランス社会党革命左派のダニエル・ゲランは、「ファシズムは本質的に青年の運動である」と報告していた。本稿は、このような比較ファシズム的視点をも意識しつつ、ヴィシー政権下の青年運動の実態を明らかにし、フランスの青年運動の特色を説明することを目的としている。本稿では、とくに青年

鍊成所を取りあげて、この課題に接近しよう。

一 「ひよわで自堕落な青年」

本論にはいるまえに、当時の青年がおかれていた状況を素描しておこう。当時の若者は、非愛国的であるだけでなく社会的責任や徳性を欠いていると言われた。スポーツを嫌い、タバコやアルコールに過度にふけるひよわな肉体が問題とされた。

ペタンも、敗戦の原因をフランス人の道徳的脆弱さに求めた。彼は一九四〇年六月二〇日に、「享樂の精神が犠牲の精神に打ち勝ってしまった。人びとは求めることのみ多くて奉仕しなかった。人びとは努力を怠った。だから今日不幸に際会したのである」と述べていた。⁽¹⁰⁾そこで、ヴィシーは宗教に道徳の指針を求めた。ヴィシー体制は、いわばカトリックの旧道徳のうえに新秩序を打ち建てようとした。つまり「新しい酒を古い皮袋に」入れようとしたのである。それは、「新しい酒は新しい皮袋に」という聖書の教えに反するものであった。ヴィシーの本質的な矛盾は、すでにここに胚胎している。この矛盾が、ヴィシーを曖昧模糊とした体制にしたのである。

実際問題として、休戦直後には、戦争やエクソダス（大脱出）によって家族と離反し職を失った青年の道徳的退廃の問題があった。復員した若者のうち九万二〇〇〇人が両親や家を失っていた。たしかに少年犯罪はヴィシー期に増加した。⁽¹¹⁾戦前の一九三八年に一〇〇〇人当たり一九四人の少年犯罪の率であったが、一九四〇年には二三八人、一九四一年には四六六人、一九四二年には五三一人と増加の一途をたどった。その後やや減少するが、一九四四年でも三五一人であった。裁判に付託された者の総計では、一九四二年の時点で三万四七八一人おり、このうちパリが三五

六六人を占めた。おもな犯罪は、浮浪罪、食品や燃料や金品の窃盗と盗品の横流し、売春などであった。

ペタンの青年運動担当顧問であったアクション・フランセーズ系のアンリ・マシスは、問題を公民教育の問題とみていた。⁽¹²⁾モラルの権化と言ふべき教会は、ダンスホールを非難しポルノ雑誌の流通を嘆いた。そこで青少年の保護という観点から、学校近辺でのカフェの営業禁止や強い酒の飲酒禁止がアルコール対策として考案された。一九四〇年八月二五日法は、一六度以上のアペリティブの消費を禁止し、火木土の週三回はアルコール自体が禁止された。さらに、ワインやアペリティブへの課税とアペリティブの消費量の制限、酒類販売店舗数の制限、酩酊中の犯罪に対する情状酌量の廃止などがなされ、アルコール中毒はヴィシー期に減少した。⁽¹³⁾

以上のようなアルコール対策はあったが、少年犯罪は目にあまるものであった。ヴィシー政府は少年犯罪の増加をまえにして、一九四三年に道德的危機にある子どものための専門会議や青少年の再教育と救済のための協会を設けたが、同様の目的を持って道德的な規律を教える組織として早期に設けられたのが青少年組織である。それでは次節以降で、その経緯を追ってみよう。

二 複数の青年運動

ヴィシー政府が誕生して約一カ月後の一九四〇年八月一三日に、ペタン元帥は国民に発した訓辞のなかで「戦争の犠牲者のなかで青年はとりわけ気がかりの的である」と語り、青年の組織化について考えを述べていた。彼は、「新しいフランスの希望」である青年の悲惨な境遇に同情を示し、「フランスの未来」を担う青年への支援を訴えた。青年は年長世代の過ちの犠牲者だと見なされた。ペタンは、参戦しなかった一九四〇年兵に労働作業場が開かれ、彼ら

に森林やキャンプ場や競技場の開発、村の「青年の家」の建設などの仕事が与えられ、これらの作業によってフランスの若返りが始まる、と告げた。しかしペタンは、既存のあらゆる青年運動は維持され、それらの独自性は尊重され、その活動は新しいイニシアティブによって鼓舞され拡大され完成されると明言した。そして彼は、フランスの青年をたくましくして心身ともに健康な青年に、フランス人男女の魂を高めるといふ使命に備えるのできた青年に育てるといふ同じ努力を、すべての運動体に要求した。⁽¹⁴⁾

国民革命の原理がカトリック教会の教義に大きく依存する以上、多様な青年組織を容認するペタンの態度は当然であつた。だから、カトリック系の青少年組織はそのまま存続が許された。カトリック系のフランス・ボーイスカウト連盟が、巡礼の地ル・ピユイで一九四二年八月一五日の聖母被昇天祭を、教皇大使列席のもとにリヨン大司教ジェズリエ枢機卿が主宰して執り行ったとき、海軍大佐が元帥の名代として、ラミランが政府代表として出席していた。ペタンはメッセージを寄せて、ボーイスカウト連盟のなかに連合・努力・信仰・名誉・規律などのシンボルを見いだして讃えた。⁽¹⁵⁾

こうして既存の青年運動は公認されたが、ドイツ型の単一の青年組織を志向する者もいた。しかし、カトリックもプロテスタントも自派の青年組織の独立を望んだし、ドイツ占領軍は占領地域での青年組織を禁じたので、単一の青年組織は画餅に帰した。ペタンも、既存の多面的な運動を尊重することを保証していた。ポードゥアン総理府長官は一九四〇年一月に、主要な青年組織の代表と会見して、単一の指導下にさまざまな青年運動を糾合することは問題外だと語った。⁽¹⁶⁾ また彼は、ジェルリエ枢機卿に「青年の単一組織」に反対であることを再保証した。ポードゥアンは青少年問題の中心人物であつた。青少年庁は総理府の所管であつた。

その間にも、ダルラン副首相の周囲においてドイツ型の青年運動をめざしたピュシユール内務大臣、マリオン情報大臣、

ベルジュリ大使、ジャン・マーズたちは、「フランスの仲間」を単一組織に変えるための策略を弄した。しかしリエナル枢機卿は、一九四一年五月に、単一の青年組織の出現によって教会の影響下から青年が引き抜かれるのではないかと恐れた。フランスのプロテスタント教会連合の会長で、プロテスタント青年会議を率いたマルク・ブーニエ牧師も単一の青年組織に反対で、一九四一年一〇月にピュシュー内相と会談し、宗教運動は手を触れられないことを明らかにするが、ピュシューは未来の政治家を鍛えるために他のライバル組織を作ると警告した。サリエージュ枢機卿も全体主義的運動を批判した。⁽¹⁷⁾

このような宗教人の姿勢を支持する集団も生まれていた。一九四一年四月七日にラミラン青少年庁長官は、多様な青年組織を集めた青年全国評議会を開催した。そこには、フランス・ボーイスカウト連盟からラフォン將軍、フランス・キリスト教勤労青年(JOCF)総裁のジャンヌ・オベール、フランス青年カトリック行動団(ACJF)のアルベール・ゴルテ、農民青年団のシャルル・ニコのほか、青少年庁次官のルイ・ガロンヌ、ユリアージュ幹部学校のデュノワイエ・ド・スゴンザックなどがおり、教会利益のロビー集団として機能した。このような青年運動への教会の影響力の強さは、政府内でも権威的にかつ世俗的な国民革命を志向する一派から批判された。⁽¹⁸⁾

それでも教会は、青年運動の多元主義を公式に表明する。一九四一年二月に自由地区で、また七月に占領地区でも開かれた枢機卿と司教と大司教の総会は、「国民に奉仕する統一した青年団に賛成。単一の青年組織に反対」と声明した。この声明はACJFに伝えられ、ラミランやド・スゴンザックや『ル・モンド』の創始者のブーヴーメリなどのユリアージュ・グループも支持した。このような主張は、対独協力主義派の新聞『ウーヴル』から非難を浴びた。一九四一年一二月に、ドリオ派の機関紙『青年』は、独伊の青年運動をモデルとした統一された青年運動を主張していた。ソルボンヌの講師であったモーリス・バルデーシュは、統一された青年運動は一党制国家への序曲であると述

べていた。⁽¹⁹⁾

青年運動の組織形態をめぐる対立は、その後も続く。一九四二年三月上旬の国民評議会青少年委員会で、親独派ではないラミランやド・スゴンザックやド・トゥルヌミールは、ピユシユール、ベルジュリ、アンリ・マシスによって激しく攻撃された。しかしペタンは、三月五日の開会演説のなかで、これまでのヴィシーの青少年対策を次のように語った。ヴィシー政府は既存の青年運動を激励し、新しい運動を生みだし、家族を肉体的にも精神的にも支持したし、アルコールや猥褻な本や映画、不健全な興奮を煽りたてるものから青少年を守ることを惜しまなかった。青少年に努力や労働や英雄主義や自己犠牲を教えてきた。今やこれらの試みから教訓を引き出すべきときであり、青少年問題を国民的問題のなかに位置づける必要がある。ペタンは、「青年運動の多様性は維持されるべきである。なぜなら多様性は、フランスの精神的家族の実質的な多彩さに対応するからである」と述べ、元帥はさらに「国家による青年運動を欲しないし、単一の青年運動も望まない」ことを繰り返し、青少年の公民的で愛国的な教育は家族や教会や職能団体などの役割だと語ったのである。⁽²⁰⁾これに対して、マルセル・デアは『ウーヴル』(一九四二年三月二三日)のなかで、単一の青年団と単一の政党がなければ真の近代国家は存在しないと繰り返した。

一九四三年三月のラミランの辞任後に、単一の青年組織への三度目の動きが燃えあがった。一九四一年末から四二年初めにかけて空襲などの戦災からの住民保護を目的として公的に設けられた「国民の仲間」(Equipes Nationales)を、一九四三年九月に統一推進派のペロルソンが単一の青年組織をめざして再編しようとしたが、ナチスのような青年運動の一元化はついに実現しなかった。⁽²¹⁾ペロルソンは、一九四二年二月に辞任していた多元派のガロンヌに代わって、同年六月に青少年庁次官となっていた。⁽²²⁾

本節の最後に、ラミランが青少年庁長官に任命された理由を見ておこう。彼は、リヨティ元帥の著書『将校の社会

的役割⁽²³⁾』の影響を受けて、一九三二年に『技師の社会的役割』を著してペタンの注目を浴びていた。この本に、リヨテイが序文を書いている。そのなかでラミランは、産業家は青年労働者に規律や建設的行動や位階的な社会秩序への従順さをおして性格形成に関する軍事指導者の考えを適用することを望むと、記していた。ペタンも学校の教育的役割の継続として徴兵制を考えていた。⁽²⁴⁾青年に軍隊的編成と規律を施すことが求められたのである。

リヨテイの影響を受けた軍人たちも第二次大戦前に、社会問題を議論するクラブを作っていた。そのなかに、青年錬成所の指導者になるド・ラ・ポルト・デュ・ティユ将軍や、ユリアージュ幹部学校の創設者になるカトリック騎兵隊将校のド・スゴンザックもいた。スカウト運動に従事してきたドミニコ会のマルセル・ドニ・フォレスティエールは青年錬成所の隊付き神父になった。彼はデュ・ティユの友人であった。これらの指導者は、各組織の独立を尊重した。かれらは、一元的な青年組織をめざした対独協力主義者とは見解を異にしたのである。

三 青年錬成所

1 青年錬成所の誕生

先述した多様な青年運動体の一つとして、青年錬成所は生み出された。⁽²⁵⁾青年錬成所は、ヴィシーの主要な青年組織であり、ヴィシーの公的制度であった。錬成所は一九四〇年七月三十一日の法律によって組織されたが、満場一致で祝福されて誕生したわけではなかった。錬成所の結成にいたる経緯について、指導者のド・ラ・ポルト・デュ・ティユ将軍は次のように述べている。⁽²⁶⁾七月四日に、彼は友人で参謀本部副官から休戦直前の六月八、九日に召集された

数千人の新兵の指揮を陸軍大臣コルソン将軍が彼に任せたと聞かされた。彼はこの使命は一時的なものだと考えたが、翌日に陸軍大臣と会って、完全なイニシアティブを与えられた。七月一日に、デュ・テイユは計画案を提出し承認された。デュ・テイユの案には、隊編成や都市のよからぬ影響から青年を逃れさせるための自然のなかでのキャンプ生活や公共事業といった、後の錬成所の機構や方針が記されていた。軍にとっても、動員解除された予備役将校の就職先として錬成所の幹部職が位置づけられていた。さらに徴兵制度が廃止されたために、軍事教練を課しないフランス青年の受け皿としても錬成所は位置づけられた。

七月十五日の最初のテキストには、労働作業場でのフランス人の国民的義務奉仕期間を設けるとあった。このテキストは修正を加えられたが、錬成所が陸軍省と明確に結びついていなかったため、イバルネガレー初代青少年庁長官が躊躇したために、閣議を通らなかった。ヴィシー政府の関係者は、ドイツ占領軍の不興を買うのを恐れてためらいを示したのである。七月二十九日に陸軍大臣が、錬成所結成に一步踏み出すべくデュ・テイユをせきたてるが、閣議は一九四〇年兵を家庭に帰す政令を元帥に提出することを拒んだ。翌三〇日にデュ・テイユは国防省に呼び出され、晩に錬成所を公認する政令がペタン元帥によって署名された。この間の政府内の政治力学をつまびらかにしないが、^(註)三十一日に公布された政令によって、六月に召集された青年は翌日に動員解除されて民間人となり、彼らは、青少年庁の管轄下に結成される「青年団」(Groupements de Jeunesse)に半年間編入されることになった。この政令は法として施行されたが、そこには青年団の規約も原理も目的も明示されていなかった。四〇年九月半ばまでに三一の団が編成されたが、物資不足のため服装もちぐはぐであったし、窃盗なども多くて、指導者の権威の樹立と規律の回復が求められた。ともあれ、この青年団が錬成所(Chantiers)となるのである。

デュ・テイユが、錬成所の問題を考えた背景には次のような事情があった。一九四〇年七月一日に、休戦協定にし

たがってフランス軍は解散された。ドイツ軍が秩序の維持に最低限必要な一〇万人の軍隊しかフランスに認めなかった。一九四〇年兵の九万二〇〇〇人も動員解除された。しかし、多くの者は住居を再獲得し、さまざま家族と再会し、仕事を再び見つけるといふ物質的労苦や心労に直面した。両親を失いホームレスとなった若者や、交通手段のマヒゆえに、ただちに故郷に帰れない若者もいた。占領地区出身の青年を、境界線を越えてどうやって送り返すことができただろうか。鍊成所の初期のメンバーは、敗走して流浪し途方に暮れた一九四〇年兵からだったのである。

このような青少年の窮状に、デュ・ティユは心を悩ました⁽²⁸⁾。彼は当時五六歳で、一九三〇年代にはフランス・ポリースカウト連盟のイール・ド・フランス地方本部長を務め、スカウト運動の長い経験を持っていた。彼は週末には妻子をほっておいて、フォンテンヌブローの森へキャンプに行ってしまうという生活を送っていた。このようなスカウト運動の精神や機構が鍊成所にも刻みこまれるのは、コロラリーと言いうる。

彼は、スカウト運動の理想と準軍事組織とを結びつけようとして、二〇歳の若人をこの種の役務につかせることを提案した。軍務を離れた青年を農業や林業の現場に送って、全体の利益になる仕事につかせようとしたのである。農業 (agriculture) や林業 (silviculture) は、心身の修養 (culture) を強く意識させたことであろう。一九四一年の宣伝パンフレットは、鍊成所の目的を失業対策においているが、それも目的の一つであった⁽²⁹⁾。それ以上に鍊成所は、キャンプ生活をつうじて同志的結合を打ちたて、諸社会階級を融合させ、都市と農村とを接近させる手段と位置づけられた。ここには、無秩序な産業文明と都市化の波がフランス社会の対立を拡大し、純朴な農村を危機に陥れたという現状認識があった。それは、ペタンの「大地は嘘をつかない」という農本主義と共鳴するものであった。パンフレットのなかでも、「農村生活の人間形成力」が重視されたり、「農民の個性の尊重は、諸価値のより健全なヒエラルヒーの徴標である」と語られていた⁽³⁰⁾。

2 青年鍊成所の歴史

青年鍊成所の歴史は五つの時期に区分することができる⁽³¹⁾。第一期は、一九四〇年八月の誕生から四一年一月までの組織化の時期である。手さぐりの状態で組織化を進めてきた鍊成所が、四一年一月の法によってフランス社会に根をおろす時期である。しかし鍊成所は、軍隊的組織へと発展する芽を持つがゆえに、ドイツ国防軍の疑惑の目につねにさらされていたし、食糧や物資の不足、隊員による窃盗と横領などは、批判的になった。親たちは、キャンプ生活の厳しさに苦情を寄せたし、キャンプがドイツの兵役センターになるのではないかと恐れた。このような抗議はヴィシー政府をも動かし、政府は鍊成所に対する視察や調査を増やして、デュ・テイユに説明を求めた。一九四〇年一月には、鍊成所の解散すら政府は考えていた。デュ・テイユは、鍊成所が軍隊と一線を画すべく努めたし、鍊成所が、青年に勤勉さや社会性や祖国を教えこみ、フランスの将来の幹部を作り出すという教育的任務を達成しようと主張した。かくして四〇年一月に、アンティジェル陸軍大臣の支持と青少年庁長官の保証を得たのである。この結果が、四一年一月一八日の法であった。

第二期は、ダルランのヴィシー期に当たる四一年二月から四二年四月までの時期である。鍊成所は常設の制度となり、原理も磨きがかけられ、国民革命の精神をもっとも体現した時期である。鍊成所の発展期であり、約一〇万人の隊員を数え、五二の団があつたときである。この時期のカルコピーノ国民教育大臣のもとで、デュ・テイユとラミラントとテラシエール、オリンピックの元テニス選手ポトラは省内の四課を占め、ドイツの勝利には中立的か反対かであつた。しかし、政府内の対独協力派から青年運動の統一に向けた圧力が強まる時期でもあつた。

第三期は、ラヴァルの再登場からドイツ軍によるフランス全土占領までの四二年四月から四二年一月の時期であ

る。ラヴアルの復帰とともに錬成所は、国民教育省の管轄下に移り、新たな方向づけがなされた時期である。対独協力政策に加わるように錬成所に圧力がかけられたときである。すでに四二年二月には、ドイツで一年間働いた者は錬成所での義務奉仕を免除されていたし、四二年七月にはユダヤ人が排除され、風向きは変化していた。

第四期は、四二年一月から四四年一月までの時期である。錬成所は存続したが、その方向性や生存についての不確実性が増大した時期である。一九四三年二月からドイツでの強制労働徴用が始まり、錬成所はそれに従うのか否かが問われたときであった。

第五期は、四四年一月の警察国家の成立から解放までの時期である。四四年一月四日にデュ・テイユ將軍はドイツ軍によって逮捕され、フランス人青年をドイツで強制労働に従事させる政策に反対したという理由でドイツへ追放された。こうして錬成所は終局を迎えるのである。

3 青年錬成所の機構

第一期生の半年の訓練期間が終了する一九四一年一月に、二カ月の期間延長と運動の義務化を決める法が通過した。この一月一八日法は、錬成所に安定した性格をもたらし⁽³²⁾た。これによって、いわば試行期間が終わり、錬成所は常設の国の制度となった。その目的は、「全階級が融合したフランスの青年に道徳的で男性的な教育を補足すること⁽³³⁾」とであり、その教育が同じ国民的信念の熱情のなかで結ばれる健全で誠実な指導者と人間を創ること⁽³³⁾であった。この一月一八日法で召集に応じない者は、五年の禁固と一〇〇〇フランの罰金が課せられた。

かくして、二〇歳のすべての青年に参加が義務づけられた。訓練期間は六カ月から八カ月に延ばされ、青年錬成所総本部は国民教育省と青少年庁に結びつけられた。臨時の総本部がクレルモン・フェランにおかれたが、正式の司令

部は、一九四〇年一〇月からピュイードードーム県のシャテル・ギュヨンに設けられた。この時点で、鍊成所は八万六七四〇人を組織していた。総本部長には、デュ・テイユ將軍がなった。総本部には、庶務課、労働課、保健課、職員課、新聞・宣伝課の五つの課があった。北アフリカに一つと自由地区に五つの地方本部が設けられ、総本部と同様の組織を持った。地方本部事務局は、アルジェ、クレルモン・フェラン、リヨン、マルセイユ、モンペリエ、トゥールーズにおかれた。各地方本部は、地域の鍊成所と接触を保ち、衛生・食事・住居の状況や労働条件や道徳的涵養の条件などを監督した。鍊成所の幹部は軍から、キャンプ地は河川森林資源局から供給された。デュ・テイユの父親は、河川森林資源局の監督官であった。

自由地区の地方本部には軍隊の連隊に相当する八から一〇の団 (groupement) があり、一つの団は約一五〇〇から二二〇〇人の団員を擁した。たとえば第三七団には、一七〇〇人の団員に対して、司令官と四人の補佐と五人の助手、プロテスタント一名と二名のカトリックの隊付き牧師や神父、三名の医者と一名の歯科医と薬剤師がいた。団のなかには、労働係・職員係・保健係・教育係・運輸係・社会係・司祭係という七つの行政組織がおかれた。六つの地方本部が管轄する団の数は、四七〇五二であり、団員は約一〇万人に達した。おのおのの団は、革命家や共和派や芸術家の名ではなくて、軍隊や中世やカトリックの英雄を守護聖人とした。ロラン、ジャンヌ・ダルク、ボナパルト、ジョッフル、フォッシユ、ペタンなどの軍人の名を取ることが多かった。またおのおのの団は、「つねにフランスを」「大胆に前進」「目的をめざせ」などのスローガンを持っていた。同一地域の作業場にある団は、森林の開墾や植林、沼地の干拓などの全体的な作業に従事した。

この団は、軍隊の中隊に当たる七から一二の隊 (groupe) から構成され、一つの隊は一五〇〜二〇〇人ほどの隊員からなつた。隊は自身のキャンプを持っていた。キャンプはテントや組立式の小屋であった。隊のキャンプはわざと

都会から離れた場所に設けられた⁽³⁵⁾。それは、「大地への回帰」というヴィシーの農村的フランスのノスタルジーと共鳴していた。隊には、二二〜二八歳の数歳年長の隊長がいた。隊長は二〜三年を錬成所の助手として過ごし、その間に各地方本部ごとに一つの割で組織された指導者養成学校で一年間の課程を修了した者になった。隊長は労働の実施に責任を負い、体育や展覧会や余暇を指導した。隊は一〇の班 (equipe) が集まって形成された。したがって、一つの団には一〇〇以上の班があつた。

錬成所の基本単位は、一二〜一五人からなる班である。この班こそ、錬成所の生活と労働の統合がなされる「真のかまど」と位置づけられた。デュ・テイユは、「おのおのの班が眠りの場、合流の場、食事の場、学びの場、集いの場であることを望んだ」。班には同年令の班長がいた。錬成所のリーダーは、若くて自発性に富むという条件を満たす見習士官学校の生徒から主要にリクルートされた。班長は、最初の四カ月の間に選ばれて数週間の特別養成コースを経て作り出された。一般隊員の日当は一・五フラン、班長は三フランであつた。

この班長会議を毎日主宰したのが隊長である。ここでは一日の反省や翌日の活動についての話し合いのほかに、隊員の心身状況も報告された。行動は班単位の共同行動として行われ、一日の半分は労働に、他の半分は体育と学習などに費やされた。こうして、労働と娯楽をともにする連帯的な共同体が築きあげられることになった。「仲間精神」が生まれることが期待された。また隊長会が毎週、団長によって開かれた。ここでは行政や機構の問題のほかに、班長教育の実施や育成などが話し合われた。団長たちは月に二回、会合を持った。団長は四〇歳代であり、団の指揮を執り、労働や食糧に責任を負い、キャンプの視察を行った。

デュ・テイユは、運動の成功は指導部の質にかかっていると考えた。一九四二年三月までに常任スタッフは四〇四〇人となり、このなかには一六三人の隊付き聖職者もいたが、ほとんどがイエズス派であつた。彼らのために、祖国

への義務や祖国の概念についての特別講義があつた。もつとも年長の指導者は軍の将校であり、四二年六月の時点では一六五人中の一六三人を数えた。それより若い指導者は陸軍士官学校生徒であつた。このように錬成所の指導者には軍出身者の占める割合が高いけれども、錬成所でボランティアとして働く軍の関係者はあまり成功を収めなかつた。最下級の幹部は一般隊員から選ばれた。このため、ある指導者訓練課程では、八一人の訓練生のうち半分が学生・神学校学生・初等教師であつた。指導者には無私が求められた。なぜなら、デュ・テイユ將軍はペタン元帥と同じく、利他主義や徳性の衰退とエゴイズムと欲望の蔓延に欠陥を見たからである。また、指導者には知性より健康が重視された。しかしデュ・テイユは、指導者は個人にとどまるべきであり、トップダウンではなくて指導者のイニシアティブは尊重されるべきことを語って、全体主義国の指導部との相違を強調した。

4 青年錬成所の理想と現実

錬成所は、デュ・テイユ將軍個人に依拠した組織であつた。錬成所は、軍とスカウト運動の影響を大きく受けている。錬成所がスカウト運動の影響を受けていることは、自然のなかでキャンプ生活をし、キャンプファイアや夜の集いやコーラスなどを重視しているところに表れている。錬成所の新入隊員は「若きフランス」と呼ばれ、スカウト運動の模倣である「備えよつねに」が運動のモットーだと教えられた。軍の影響は日課や機構に明らかである。

実際には、錬成所は軍事組織や準軍事組織にはなりえなかつた。デュ・テイユ將軍も、錬成所の即時解散をもたらすような武器の隠匿による錬成所の正規軍化の試みに正式に反対した。ドイツ軍は、もちろんそれを許さなかつた。ただ、指導者に軍出身者が多く、その影響が刻印されたことは否めない。錬成所の日常生活のなかに、行進、敬礼、

規律、国旗掲揚、制服など、軍の生活様式が取り入れられた。また、指導者への忠誠と服従や位階制も権威主義の特徴ではあるが、それは軍隊組織のエートスでもあった。

軍とスカウト運動の二つは、デュ・テイユ個人によつて具現された。彼は職業軍人であり、かつスカウト運動の責任者であった。鍊成所の原理もデュ・テイユによつて練りあげられた。だから、鍊成所の思想を論ずることはデュ・テイユ個人の思想を論ずることに等しいのである。⁽³⁶⁾

彼は理工科学校出身で、陸軍大学校教授や砲兵学校長を勤めたこともあった。彼は経験主義者であり、体系的で独断的な思想とは無縁の人物であった。彼の原理は、人工的な都市文明に対する反感や元帥への崇拜、キリスト教国民の祖先の伝統を護持することなどに要約できた。

彼がペタンの国民革命に熱狂する兵士であったことは事実である。それは、ペタン個人とヴィシー政府への忠誠として表現された。鍊成所は非政治主義を方針としていたが、政治とは、フランス人の間に分裂をもたらす要素と考えられたからである。ペタン元帥の行動を論議することではなくて、彼を信頼することが求められた。鍊成所の講義には、元帥のメッセージや国民革命の素材が用いられた。

彼は鍊成所に二重の目的を与えた。一つは、国民経済に有用な仕事を青年に与えて国に奉仕させること、他の一つは、教育活動に青年を導くことであった。この二つは、デュ・テイユのなかで分かちがたく結びついていた。つまり、彼は鍊成所をフランス再興の本質的な道具としたかったのである。鍊成所は、フランス青年に理想を教化する手段であり、そこでの教育は青年を道徳的市民的愛国的にする手段と考えられた。鍊成所が目的とした青少年育成とは、国民革命への使徒的な使命感、国に奉仕する労働を青年に教えることであつた。このように教育を重視するデュ・テイユは、ペタンから一九四三年末に国民教育大臣の候補としてあげられるほどであつた。⁽³⁷⁾

国民革命のスローガンの一つが「労働」であるように、労働は、教育的価値にとって本質的なものと見なされた。社会にとって、労働や連帯の概念の重要性を人々に教えるべく努力された。社会に有用なものを生み出すことが重要であった。鍊成所の人手は、はじめ農務省が草刈や収穫などに用いた。ついで暖房用の木材や木炭の供給、土地の耕作や森を切り開いた道路建設などの仕事があった。木炭製造は、木炭が自動車の燃料として用いられていたこともあり、当時の経済的必要性に対応していた。隊員や指導者はこの種の仕事に不慣れであったので、はじめは作業の能率は悪かった。デュ・テイユは一万八〇〇〇人の隊員が葡萄の取り入れに参加し、木炭一五〇〇トンと一〇万立法メートルの暖房用木材の成果を得たことを誇示し、四二年には野菜の大半を産出すると豪語すらした。またペタンは過去の職人的フランスを理想としたが、職人層を育成すべく技術教育も鍊成所では重視された。しかし、デュ・テイユも率直に認めているように、道具不足や資格をもつ指導員不足ゆえにこの目的は達成されなかった。⁽³⁸⁾

鍊成所の目的の一つである道德教育は、名誉と義務を重んじた訓練、「名誉崇拜」や共生をつうじた道德的規律を重視した。デュ・テイユ將軍は宗教的確信にもとづいた道德的原理で知られていた。彼は鍊成所を、ペタンとフランスへの忠誠だけを持った非政治的なものにしたかった。將軍は、一九四一年二月に「元帥の人柄は、満場一致の尊敬と信賴の的である。元帥の行動は大衆の支持を集めている」と隊員に語った。⁽³⁹⁾

道德教育はヴィシーの幹であり、鍊成所もそれに従った。道德のプログラムには、名誉、国家への誠実さ、公正、愛国心、自由、労働への愛、家族愛、家庭、連帯、自己犠牲、献身、努力、仲間精神、社会的美徳などの徳目が列挙された。宗教は私事だとされたが、鍊成所にも多くの隊付き聖職者がおり、カウンセラーや精神的指導者として振舞った。デュ・テイユは一九四〇年九月に、「隊付き聖職者は、団長にとって真の助手である。彼らはもつとも重要な心の分野でその責任を果たす」と讚えた。⁽⁴⁰⁾

デュ・テイユは四〇年一〇月の週報で道德教育のプログラムを述べていた。⁽⁴⁾それは名誉から英雄主義までの美德のカタログといった趣のあるもので、歴史ではポレミックは避けられ、伝記と通史からなる二つのプログラムが用意された。伝記を用いた倫理が説かれた。取りあげられる英雄とその記号は、ウエルキンゲトリクス（古代ガリアの抵抗）、シャルルマーニュ（文明の精華）、ジャンヌ・ダルク（領土の防衛）、ルイ一四世（フランスの統一）、ナポレオン（近代フランスの条件）、パストゥール（科学的人道的天才）、リヨテイ（植民地の天才）であった。第三共和政は無視された。このメニューはナショナリズムをかき立てる内容を持っていた。このように歴史や地理は、隊員にフランスと帝国を教え、祖国を愛させ、国民共同体の感覚を与えることを目的としていたのである。⁽⁴⁾

しかし、このナショナリズムはドイツ占領軍に向けられてはならなかった。ナショナリズムを強調する教育はドイツの不信を買った。ヴィシー政府は、国民革命の純化を押し進めようとすればするほど、矛盾に突き当たったのである。ヴィシーの伝統への回帰も、ドイツ占領軍の存在ゆえに不徹底なもの、曖昧なものに終わらざるをえない。

道德訓練の第一の原理は、自尊にもとづく個人の名誉感に訴えることであった。それによれば、共通善のための自己犠牲が性格を鍛え、友愛を育みつつ、責任感や他者への義務感を発達させると言われた。このような友愛が最も重要なものと位置づけられ、それは、キャンプファイアの回りでの夕べのひとときによって鼓舞されると考えられた。要するに、「男らしさ」の鍛錬が道德的訓練につながるとされた。戸外での労働と実習、太陽と空気と水に体をさらす健康法が重視されたのも、そのためである。自然と接するアウトドアライフは、人間を高め強壮にし、不快にも耐えさせると考えられた。このような「男らしさ」というジェンダーの強調は、強力な指導者崇拜というファシズムの心性と相関するものである。しかしデュ・テイユ将軍は、現実の新人隊員が悪い肉体条件にあることを認めた。とくに学生の肉体的弱体に関心が集まった。そこで将軍は、国立体育学校から育つ体育教師の新世代に彼の希望を託すこ

とした。理想は完璧な肉体的健康であったが、戦争という状況下では非現実的であった。

このように体育が強調されたのには理由がある。ヴィシーは、敗戦はフランス青年の軟弱さも一因であると考え、体育教育とスポーツを奨励したからである。ペタンは、一九四〇年八月の『両世界評論』に「国民教育」と題する論説を掲載して、教育改革を訴え、スポーツによって「健康、勇氣、規律」を与えようとした。⁽⁴³⁾ 当時の七七ページの宣伝冊子にも、「元帥は、青年を作り直しつつしか国民を取り戻せないことをよく知っていた」と記されている。⁽⁴⁴⁾ 一九四〇年八月にヴィシーは、オリンピックのテニス選手ボロトラの指導下にスポーツ総合委員会を設置し肉体の鍛錬をめざす。同年十一月の通達で、小学校に三〜四時間の体育授業を勧めた。教会も「健全な肉体に健全な精神」が宿るとして、体育に賛成するが、スポーツの流行が宗教的義務を忘れさせることを懸念しもした。⁽⁴⁵⁾

社会的融合は今一つの公民教育の理想であった。デュ・テイユは、学生が手の技術を欠き、学業の中断を後悔し、手仕事を時間の浪費と考えていることに気づいた。これは、手仕事を賛美する錬成所の方針に反することであった。ところがラミランを補佐するペロルソンは、隊員の待遇の完全な平等を望んだ。かくして学生は、技術不足を補うための役務期間の延長が許されなかった。なぜなら、学生にのみ補習を課すことは、錬成所の最重要な側面の一つである社会的融合を無にすると考えられたからである。デュ・テイユも、新しいフランスの形成における学生を中心的役割を認めるけれども、指導者の資質は一つの社会階層の特権ではないと考えた。錬成所が、ヴィシー政府の労働憲章を支持したのも、それが諸階級の協調のシンボルであったからである。

デュ・テイユ將軍は、一九四一年二月の最初の召集隊の解散式のときに、社会的融合について楽観的見解を述べていた。⁽⁴⁶⁾ はじめ隊員の士気は嘆かわしかったし、テントの麻布や毛布、調理器具や道具もなかった。良家の子息と労働者の若者が雑居状態にあることや良家の子息を伐採や道路工事の手作業に従事させることに、ブルジョアジーは不

満を述べたが、今や青年の愛国心は、これらの青年が比類なき自己犠牲を受け入れるまでに輝いていると語って、將軍は、愛国心・社会・個人道徳・健康・労働の分野について、鍊成所が果たした役割を総括した。愛国心に燃えて、一〇人に一人は国民革命のためのアクティヴな活動家となつたし、階級と職業と出身地方を異にする青年たちが鍊成所のなかで一つに溶けあつた。個人的に彼らは誠実さや自己統御を学び、病氣も減り、体軀の向上を見た。青年の根本的明白な変化はまだ実行されていないけれども、必要な再建は始まつた、と。

民衆階層出身の青年とブルジョア青年とのハビトゥスやプラチックの違いがなお大きかつたこの時代を勘合する⁽¹⁷⁾と、ヴィシーの社会的融合政策は、青年の社会的統合という面で一定の役割を果たしたと評価することもできる。しかしここでも、ヴィシーは異なる階層には異なる教育課程を与えて、社会的ヒエラルヒーを維持しようとしたので、諸階級融合の理念も、欺瞞的で曖昧なものに終わらざるをえなかつた。⁽¹⁸⁾

公民教育に関する鍊成所の教義は単純で、それは共同体の理想にもとづき、ペタンの演説のなかに含まれる国家のドクトリンを教えることであつた。青年に愛国心を育むことが課題とされた。同時に、鍊成所の教育はアカデミックで文化的で職業的目的を持つた。鍊成所の隊員は授業に出るように言われた。文盲者は二割を占めたし、初等卒業資格を取っていない者もいた。彼らは歴史や地理を学んだ。ある団では三四人の初等卒業資格の候補者が出て、そのうちの三〇人が修了した。⁽¹⁹⁾その資格を持つ者は、コーラスやダンスなどの文化活動に従事した。その他、地方の記念碑を探訪したり、農民コルポラシオンの代表や社会委員会の工場労働者の講演を聞いたりした。

鍊成所の青年は、一日を三分して、肉体労働、肉体の鍛錬・教育・食事・余暇、睡眠にあてた。日課は軍隊式に編成された。六時に起床、洗面、任意の宗教礼拝。七時、国旗掲揚とコーヒー。八時、キャンプの視察。八時三〇分、遊び、歌、キャンプ設営、雑用、体操、水浴び、朝食。一〇時三〇分、パトロール隊長の助言。一一時、昼食、自由

時間。一三時から一八時、労働。一九時、夕食。二〇時、夜の集い。二一時、消灯⁽⁵⁰⁾。

とくに重視された日課の一つは、国旗の掲揚と降納である。キャンプ地の広場の中心に据えつけられたポールを隊員が取り囲んで掲揚式を行った。この式をとおして道徳教育の浸透がもくろまれた。デュ・テイユも次のように語っている。「じつくりとフランスについて考えるために、非常に高く据えつけられたポールにそって旗がゆつくりと厳かに上がり降りしたとき、君たちは涙があふれるのをしばしば感じた」。錬成所総本部があるシャテル・ギュヨンには、高さ三三メートル、重さ二トンの巨大なポールが建てられた。デュ・テイユは、それを「錬成所精神の証」だと讃えた⁽⁵¹⁾。

同様に重視された日課は、キャンプファイアの回りでの「夜の集い」である。スカウト運動のキャンプファイアをまねたものであるが、そこでは同志愛と家族的雰囲気醸成がもくろまれた。デュ・テイユは次のように位置づけている。「夜の集い」は肉体と精神の息抜きであり、歌を歌ったり話をしたり、細かい手仕事をしながらおしゃべりをしたり気晴らしをするために、火の回りで行う班の仲間集いのことである。この息抜きのなかで、心は広がり、友情は結ばれ、有益な反省が交換される。それこそまさに教育の主要なときである。もちろん、デュ・テイユは「夜の集い」の成否が指導者の資質に大きく左右されることを認めるが、それでも錬成所のなかに生き生きとある仲間精神は、「夜の集い」に負っている⁽⁵²⁾と自負するのである。

このように過大評価された「夜の集い」であるが、そこでは、一日の反省と翌日の予定、ゲームや歌や学習が行われた。しかし、隊員たちにとってキャンプファイアは胸を躍らせるようなものではなかったし、国旗の儀式も重要とは思われなかった。余暇を過ごすこともむずかしかった。音楽好きの青年にとっても、コーラスばかりでハーモニカやアコーディオンの演奏はなかったし、読書に不慣れな者も多かった。彼らはフランス再建という錬成所の役割を評

働いたが、自分はこの事業に参加したくなかったというのが本音であった。だから除隊後は、ここでの経験はすぐに忘れられた。フランスへの真の忠誠は存在しなかった。若者は意欲と熱意を欠き、受動的であり単調な日常を好んだのである。彼らは個人的規律や道徳的判断力を欠いた不平屋であった。それでも彼らは、率直さや誠実さを重んじることを学んだし、同志的紐帯を得た。

錬成所の実習は軍事教練を含む屋外作業が中心であったが、入所者の不満は大きかった。なぜなら、食糧は乏しくて粗食のうえに着替えの服もなく、斧やスコップや鶴嘴の道具もなく、薬も電気もないなかで、自分たちのキャンプを設営し、土地を開墾し小屋を建て、納屋の土の上で眠るといふ生活を強いられたからである。食糧不足はキャンプ内での闇市をもたらし、隊長が隊の食糧の一部を横領して家族に送るといふケースもあった。息子たちの窮状に胸を痛めた親が食糧小包を送ったこともあったが、錬成所は、隊員の家族が息子たちに食糧小包を送るのを禁じた。デュ・ティユは両親の過保護を非難し、七割の青年は体重が五キロ増えたと訴えた。⁽³³⁾

また森林が多い南部では、木の伐採や炭焼きは昼夜しつづけねばならない標準的活動であった。道路建設という他の力仕事もあった。指導部は、これらの仕事で心身を強健にするところに利点を見いだしていたが、隊員にとってそれは辛い仕事であり、彼らの多くは、女性のこと、食糧のこと、外出許可のことしか考えていなかったと言われる。このような不満や窮状を家族に訴えた手紙も多かった。もちろんヴィシー期には、手紙は開封されて検閲されていた。一九四二年一月に出された学生と推測される二、三の手紙には、キャンプでの生活が絶えがたいことや錬成所の解散の夢以外持っていないこと、冬期の寒さが身にこたえること、毎日山で木を切り倒して木炭にする仕事の辛さや、同種の仕事で手首が腫れて手はまめだらけになったといふ苦情が記されている。⁽³⁴⁾

このような不平不満を高じさせたのは、規律の厳しさであった。初期のキャンプ内には、ラジオも映画も新聞もな

かった。宗教的理由で日曜の労働は禁じられた。清潔が重んじられ、毎朝上半身を冷たい水で洗わねばならなかった。あご髭にも決まりがあり、耳から耳まで生えさせることは禁じられた。服装もはじめは不揃いであつたが、身なりのだらしのなさは道徳的のだらしのなさにつうじるとして、ポケットに手を入れることやボタンをはずした服装や蓬髪が非難され、一九四二年七月七日の命令で制服が決められた。緑のベレー帽とブルゾン、シャツにズボンにゲートルという出で立ちであつた。もつとも、物資の欠乏ゆえに、鍊成所隊員はあちこちからかき集めて身なりを整えねばならなかった。

デュ・テイユ將軍もすでに一九四〇年夏に、「規律の維持のためには制裁は必要である」とか、「規律違反が明白な全行為は即時厳格に抑圧されるべきである」と述べていた。彼は「悪しき部下に即時の無慈悲な抑圧」を語り、二カ月の収監を宣告する権限を持つことを想起させた。そして、「過度の個人主義」がフランスの敵であると戒めた⁽⁵⁾。鍊成所は、厳格に規律された共同体であつた。

こうして、鍊成所の出版物にみられた初期の期待は影を潜め失望が増してきた。なぜならコレーズ県のあるキャンプでは、足首まで水につかる沼地にテントを設営せねばならなかったり、そのテントも防水処置が施されておらず、雨水は容易に通過したのであつた⁽⁶⁾。衛生設備は貧弱であり、焼却炉もなかった⁽⁷⁾。排水溝も十分でないうえに水や石鹼不足もつた。洗顔を宗教的儀式も満足に行えなかった。手が真っ黒で手に垢がこびりついているとデュ・テイユも認めざるをえなかった。このような不衛生は、キャンプを寄生虫や蚤やしらみの住処とした⁽⁸⁾。

以上のような隊員の不満をカムフラージュするべく演出されたのが、一連の集会や祭典である。鍊成所結成一周年をまえにした一九四一年六月二八と二九日の両日、ヴィシーでデュ・テイユ將軍に鍊成所の団旗を贈呈する集会が開

かれた。⁽⁵⁸⁾ペタンは、二九日の午前、北アフリカを含む全国各地から集った二五〇〇人の代表のまえで、デュ・テイクに鍊成所の団旗を手渡した。この旗は、ペタン元帥の標章と七つの金星を持ったフランクの斧が描かれた最初の旗であったし、「労働・家族・祖国」の新スローガンがある最初の旗でもあった。ダルラン副首相やカルコピノ国民教育大臣やアンティジェール陸軍大臣も参列する壇上のまえで、隊旗を持った各隊の隊長が垣根を作って、贈呈式を盛りあげた。デュ・テイクはレジオン・ドヌール勲章を授けられた。そして二五〇〇人の代表は、元帥のまえを進行して市内へ繰り出した。この集会の招待状に印刷されたスローガンには、青年を讃える字句があふれていた。「明日のフランスは、今日の青年である」「働き、歌い、信じる青年」「われわれは国民義務奉仕隊であり、二〇歳の青年が八カ月を、自然のなかでの国民のための労働という健全で喜びに満ちた生活によって国の再建と男性的な自己形成のために働くのである」、などの言葉が記されていた。⁽⁵⁹⁾また鍊成所結成一周年の時、ペタンはヴィシーのサン・ルイ教会でのミサにラミランとカルコピノを伴って参列した。ペタンは鍊成所のキャンプをしばしば訪れていたのである。

ジャーナリストのファールリュスは、一九四一年夏にシャルで開かれた鍊成所の集会について記している。⁽⁶⁰⁾隊員たちが飛行場に集結したが、三月入隊組と七月入隊組とは、日焼けした筋肉質の体と青白い顔つきによってその差は一目瞭然であった。キャンプファイアの回りで点呼が行われたが、各隊員は「立ち向かえ」とか「目的に向かつて進め」などの隊のモットーで返答した。民謡や農作業の歌や鍊成所生活のユーモアたっぷりの歌などが歌われた後で、六〇〇〇人の青年が降ろされた国旗の回りに駆け寄って、輪になり腕を絡ませ手をつないで人間の壁を作った。鍊成所の二周年では、戦士団や他の青年団体も参加して、ヴィシー近傍のトロンセの森で一大スペクタクルが繰り広げられた。初日の夕刻の劇の後に、たいまつ（たいまつ）の散会式（国旗降納式）があり、翌日の国旗掲揚式の後、花輪が戦争

記念碑に捧げられ、団体行進があった。午後には、ペタンがかつて奉納したオークの木の下で儀式が行われ、スポーツ競技やコンサートが催された。晩には水上遊戯や模造品の牛狩りなどが行われた。最後に、ラッパが別れの歌を奏で、旗が降ろされ、ラ・マルセイエーズの儀式で閉会となった。しかし、このような祭典をいくら繰り広げても、求心力は生まれてこなかった。なぜなら国旗や国歌の使用には、たががはめられており、反独ナショナリズムへと収束してはならなかったからである。ここにも、ヴィシー体制の曖昧性を見て取ることができる。

5 ヴィシーとレジスタンスのはざま

錬成所は国民革命に貢献する指導者育成を目的としたが、錬成所の指導者には親独派は少なかった。⁽⁶¹⁾ 結成当初から錬成所の青年の間には、反独感情が横溢していた。ドイツ軍によるフランス占領という事態を勘合すれば、あまりに当然の反応と言いうる。第三四団の二六三人の新入隊員の調査によれば、一五〇人が共和政を支持していた。⁽⁶²⁾ 指導者のなかには、ロンドンのラジオ放送を聞いていたり、「諸君はアルザスとロレーヌをもたない」とか、「諸君は武器を持っていないが、いつかそれを持つだろう」と語る者すらいた。錬成所は、追放されたアルザス・ロレーヌ人やユダヤ人や逃亡捕虜をかくまったりした。親独的な反共義勇軍や民兵団に対しても、錬成所の多くの青年は冷淡であった。

だからといって、錬成所がレジスタンス組織であったということにはならない。たしかに錬成所のメンバーのなかから、抵抗組織のマキに加わった者やフランス解放の戦いに参加した者もいた。しかし、それは錬成所で受けた教育の結果なのかどうか不明である。結局は錬成所の活動が何であったのかに帰着するであろう。

一九四三年まで、ドゴール主義は錬成所に浸透してはいない。なぜなら、ダブルゲームによってフランスの戦闘再

開を準備しているというペタン像を信頼している限り、ペタン政府に反抗するドゴールの立場は有害なものとは判断されるからである。この見地からは、ドゴールは反体制派とか分裂策動者として非難されるのである。これに対してペタンは、つねに「ヴェルダンの英雄」であり、鍊成所のテキストやメッセージによって、それが広められた。ペタンと国民革命こそが、フランスの再生を表したのである。ドゴールに共鳴する鍊成所指導者の一部すら、第三共和政に愛着を抱くドゴールの取り巻きによってドゴールが冒険的行動に投げ入れられているのではないかと恐れた。だから、ドゴールとゴリスムは鍊成所では無視された。とにかく一九四三年まで、鍊成所内ではドゴールとゴリスムへの賛成も反対も聞かれなかった。

国内レジスタンスは、鍊成所にもっと微妙な問題を提示した。ペタン崇拜が浸透していた鍊成所にとって、国内レジスタンスはペタンに刃向かう悪であった。しかし、戦況の展開とともに状況は陰影を帯び、フランスへの愛着という点で元帥への忠誠とレジスタンスへの加入との間に矛盾はなくなった。それでも、レジスタンスがフランスの解放と刷新を望み、共和的で民主的言語を用いたことは、国民革命の精神に染まった青年たちを驚かせた。また、レジスタンス内部の社共勢力に不快を感じる青年たちもいた。元帥に忠実な伝統主義的幹部は、レジスタンスには反感しか示さなかった。

鍊成所の青年たちをレジスタンスに共感させるのに寄与したのは、もっと些細な事実であった。たとえば、家族と引き離された占領地区出身の青年たちは、一九四〇〜四二年の冬に自由地区と占領地区の郵便物の配送で恩恵を得た。にせの食糧配給カードやにせの身分証明書も評価された。

一九四二年一月の連合軍の北アフリカ上陸のとき、デュ・テイユは北アフリカの視察にきていた。地方本部長のヴァン・エック (Van Hecke) が、北アフリカの鍊成所隊員をドイツと戦わせることに決め、デュ・テイユ将軍にも

戦う準備をしている青年の先頭に立ってアルジェに留まるように求めたとき、デュ・テイユはこの求めを断り、ドイツの影響を鍊成所から取り除くためにフランスに残ると述べて総本部へ帰る意図を表明した。彼は、ドイツと戦うために前線に赴くように鍊成所隊員に命じることを拒んだ。フランスに帰国して、元帥への絶対的忠誠と従来どおりの規律と服従をアピールした⁽⁶⁾。彼にとって鍊成所は、国民革命に奉仕する青年の再教育の場であり、抵抗の拠点ではなかった。鍊成所は、解放軍の基礎にはなりえなかった。

一九四三年からは、強制労働徴用(S.T.O.)と鍊成所とマキとの関係という二つの重要問題が持ちあがった。ドイツは鍊成所を労働者の貯蔵庫と見なした。S.T.O.は、ドイツに強いられたいえヴィシー政府が決定した制度であった。一九二〇〜二二年生まれの青年に、二年間のドイツでの労働奉仕が義務づけられた。国家の制度である鍊成所がS.T.O.に反対することはむずかしくなかった。しかしながら青年の多数はドイツへの旅立ちに反対であった。彼らは、鍊成所の八カ月の訓練期間があけたなら、ドイツへ行くのではなくて以前の生活に戻りたかったのである。鍊成所の責任者は、S.T.O.に反対する権利を持っていなかったが、青年の多数は出発を拒んだ。幹部たちは、時間稼ぎや一時のがれを言うことしかできなかった。

S.T.O.をまえにして、デュ・テイユはむずかしい立場にあった。ドイツの要求に対して、彼は引き延ばしや断固たる拒絶の態度で臨んだり、鍊成所の幹部に対しては服従を説いたりした。たとえば、四三年五月に首相ラヴァルが二カ月後に修了期限が到来する二万五〇〇〇人の鍊成所隊員をS.T.O.に割り当てるよう求めたときには、デュ・テイユは拒否したが、別のときには「市民の義務」という口実で政府への服従を説いたし、またS.T.O.を免れるように青年を手助けしていた指導者一八人を叱責し解任した。S.T.O.は、鍊成所の隊員に当惑やら不安をもたらした。息子に逃走を進める親もあらわれたし、抱擁を交わす機会もなくドイツに息子が出発してしまった親は、デュ・テイユ將軍の

いる総本部に抗議の手紙を送った。四三年九月にドイツがさらに三万人を要求したときには、デュ・テイユは鍊成所の解散や辞任で脅して断固反対を貫き、要求を撤回させた。それでも一九四三年だけで、一万六五八六人の鍊成所の青年がドイツに送られたのである。⁽⁶⁴⁾

それで、S T Oの動員対象となった二万五〇〇〇人のうちの約半数の青年が抵抗運動のマキに加わった。鍊成所出身者からなるマキの部隊が作られた。しかしマキと鍊成所の関係は悪かった。前者は後者をヴィシー主義者だとか対独協力派だと非難し、逆に後者は前者をテロリストだとか共産主義者だと非難した。この種のマキに参加した鍊成所隊員は少なかった。農村青年が多いマキには、鍊成所隊員は入りこめた。

そこで、ドイツは反マキの宣伝を強め、対独協力をほめそやし、S T Oを推賞した。ドイツが鍊成所のいくつかの団にただちにドイツへ赴くように要求したので、それらの団は解散させられた。ドイツは、一九四三年九月にオーヴェルニュのキャンプを搜索して、数名の反対派を逮捕したこともあった。またドイツは、道路工事用の爆発物をドイツ軍の安全にとって危険であるという理由で、鍊成所に引き渡すように催告し、いくつかのキャンプを強制搜索すらした。さらに、ドイツ兵の歩哨に鍊成所指導者が撃たれるという事件がおき、夜間には鍊成所の制服で外出しないように通達が出された。なぜなら、抵抗派が制服を着て徘徊しているという理由からであった。⁽⁶⁵⁾

かくして、一九四三年夏から秋にかけての鍊成所には重苦しい空気が漂った。鍊成所は、フランス再生のための青年の教育機関ではなくてドイツに奉仕する制度と化したかのごとくであった。青年の多くも鍊成所をS T Oの控えの間と見なしはじめた。食糧事情もいっそう悪化した。ドイツへの出発や団の解散⁽⁶⁶⁾やマキへの加入によって隊員は減ったうえに、四三年一月には鍊成所の隊員数は三万人に制限された。超過した一万人は工業生産省の管轄下におかれ、フランスでドイツのために稼働する保護工場で働かされた。⁽⁶⁷⁾ 対独協力政策はますます重くのしかかり、それは

鍊成所の公式指令のなかで強められた。ナチスからの解放という見地からは、幹部の義務はこの政策に抵抗することであった。幹部は、鍊成所の青年へのドイツの要求を拒否する固有の戦いを展開するべきであった。

6 青年鍊成所の終末

青年鍊成所は、あらゆる方向から攻撃を浴びた。マルセル・デアが一九四〇年九月一五日の『ルーヴル』紙で、鍊成所の目的は何なのかと毒づいたように、国民革命に懐疑的な占領地区の対独協力主義者からは批判があった。デアは、さらに四二年一月のドイツ軍のフランス全土占領後も、「最悪なことは、鍊成所が存続していることだ」と記した。⁽⁶⁸⁾ ドリオの週刊紙も「やめるべきスキヤンダル―青年鍊成所、幻滅鍊成所」という見出しを載せて、鍊成所の軍人中心的権威主義を非難した。また親独的なパリの新聞は、「根株を引き抜き、溝を埋め、木を切り倒すこと。しかし青年の四分の三はうろつくか散歩をするか、……あるいは、他地域でのより良い生活を経験する可能性を検討している」と記して、鍊成所の「労働」なるものを嘲笑した。さらに、朝はキャベツと人参のスープ、昼はキャベツと人参のゆでもものという食事や設備の貧弱さや士気も嘲弄的であった。

また共産党の『ユマニテ』は、鍊成所を「調教キャンプ」とか「奴隷キャンプ」と評して解散を要求した。ドゴール派も、鍊成所による青年の洗脳やナチ化を糾弾した。鍊成所はキャンプ地の土地の人からも歓迎されないケースもあった。畑が荒らされたり略奪をうけたり、生け垣が壊されたりしたし、地元の女性への青年の軽はずみな行為が非難されたのである。⁽⁶⁹⁾

カトリックの政治指導者のピエール・リマーニユも、一九四〇年一二月に、この季節には隊員が怠けてうんざりし

ていると日記に記した。また運動内部からも不満は生じた。アリエ県知事は、一九四一年一月に青年たちが合理的に使われていないことに不満を持ち、田舎出身者は、鍊成所の作業よりも家で働くほうがより生産的であるだろうと不平をこぼしたことを報告している。幹部への批判は頻繁にあった。それは一つには、兵営心理から抜けきらない軍人を鍊成所の常任スタッフとして急造したことが原因であろう。たしかに熱意のない凡庸な指導者もいたし、朝の国旗掲揚儀式に代理を送って墮眠を決めこんだ指導者もいたのである。一九四二年にデュ・テイユも、フランス青年の不服従に驚き、権威への服従や女性への礼儀を説かざるをえなかった。⁽⁷¹⁾

デュ・テイユは、一九四一年一月一日に鍊成所OB会 (Association d'Anciens des Chantiers) を組織して、退団した元隊員への影響力を保持しようとした。⁽⁷²⁾ OB会の構想は、すでに一九四〇年一二月に表明されていた。⁽⁷³⁾ OB会の目的は、「鍊成所精神」を維持し、愛国心を高め、鍊成所の活動を退団後も維持することで、国民革命の発展に寄与することであった。ドイツの怒りをOB会に向けさせないように、OB会は青年を恒常的動員状態におくものではなくて、「奉仕のための相互扶助」を目的とすると説明された。彼らは、緑のベレー帽とネクタイの着用を命じられた。一万二〇〇〇人を擁したOB会は、解放をめざした準軍事組織ではなくてペタン元帥の思想の宣伝隊を任じていた。したがってOB会の活動は、芸術・文化・スポーツ活動が中心の無害なものであった。しかし、鍊成所同様にOB会にも猜疑の眼を向けていたドイツは、一九四四年三月一四日法によってOB会を解散させた。

それでは、ドイツ占領軍は鍊成所をどう見ていたであろうか。最初は、ドイツ大使オットー・アベッツの報告にもあるように、単一の青年運動を阻止し、それらの運動の中心的地位を將軍たちが占めることを阻止したことで、アベッツは喜んだ。この意味でも、一元的な青年組織を志向した対独協力主義者の考えは、ドイツには受け入れられなかったのである。アベッツは青少年問題の専門家であった。ドイツはフランスの青年運動の中立化を望んだ。ドイツが

神経をとがらせたのは、青年組織とレジスタンスのネットワークとの結合であった。だからドイツは、鍊成所の第一期生として三万七〇〇〇人しか認めなかったし、占領地区でのリクルートを禁じた。もともと一九四一年九月には、八万五〇〇〇人の団員数があげられている。

一九四一年十一月二日の死者を悼む万霊節の記念式典は禁止されたが、鍊成所はいたるところで地方の戦争記念碑へのパレードを指令した。十一月一日は、フランスが勝利した第一次大戦の休戦記念日であった。⁽⁷³⁾また、愛国的右翼のジャック・バンヴィルの歴史書をテキストに使用したことも窺えるように、授業での愛国心の強調は、占領軍を不安にさせるほどであった。一九四二年一〇月にイギリス外務省も、青年鍊成所の反ドイツ的性格を指摘していた。事実、北アフリカでドゴール派のルクレール將軍と接触がなされていた。しかしデュ・テイユは、鍊成所がペタンとフランスへの忠誠以外の点では中立的たることを望んだ。

それどころか、鍊成所はラヴァル政府の強制労働徴用に非協力的であり、ドイツが鍊成所のキャンプをレジスタンスのリクルートの拠点と考えたこと、さらに、デュ・テイユがペタンには忠実であるがラヴァルを無視する態度を取ったことなどの理由で、占領軍は鍊成所の排除を決意した。その口実として、デュ・テイユがペタンとの食事中に東部戦線のドイツ軍はおしまいだと言ったことが取りあげられた。

こうして一九四三年末のデュ・テイユ將軍は、より微妙で曖昧な状況にいた⁽⁷⁴⁾。なぜなら、自分の地位に留まることは政府の政策の承認を意味したからである。これに対して、辞任はドイツとヴィシーの対独協力主義派の圧力に抵抗する方向へと鍊成所を移行させることにつながった。ドイツ軍は、一九四三年一〇月からデュ・テイユの排除と逮捕を考えていた。一二月末のドイツの最後通牒は、鍊成所に残っている全員はドイツないしフランスのトッド機関でドイツのために働くべきことを要求した。將軍はこれを拒否する。ラヴァル首相も、デュ・テイユの罷免がドイツ軍

によつて強く求められていることを將軍に告げた。デュ・テイユは、一九四四年一月四日にヴィシー政府によつて罷免され、同日、ドイツ軍によつてシャテル・ギユヨンの総本部で逮捕されてミュンヘンに送られた。⁽⁷⁶⁾

デュ・テイユの後任はベルノン大佐であったが、鍊成所の創始者を失つた痛手は大きかつた。ベルノンは、鍊成所の青年たちをドイツに送り込むための動員を実行に移した。一月一九日法で、青年鍊成所は工業生産省に従属する労働省の管轄下に入り、ドイツでの労働予備軍としてのみ存在が許された。二月一日には、訓練期間が八カ月から二年に延長された。⁽⁷⁶⁾しかしその後、地方本部から抗議の声があげられたり、二名の地方本部長が二月にドイツ軍に逮捕されたり、デュ・テイユの反独の立場を継承する指導者が現れたり、青年の大多数の抵抗の意志は強まつた。戦況がドイツ軍に不利になるにつれて、マキやレジスタンスに加わる鍊成所隊員も増えた。

ノルマンディー上陸の頃、まだ鍊成所は存続していたが、六月九日にラヴァルによつて正式に解散させられた。ドイツ軍も六月一五日に解散の政令を発した。ついで、ドゴールの臨時政府が七月五日の政令によつて解散を命じた。ここに、鍊成所の最後の残骸も砕け散つたのである。

むすび

青年鍊成所とは、いったい何であつたのであろうか。それは、一元的なヒトラー・ユーゲントとはほど遠いものであつた。鍊成所には批判もあつたが、賞賛もあつたことは事実である。ドイツのための労働者供給施設であると非難するものから、解放を準備することを目的としたという正反対の評価まであつた。たしかに鍊成所は貧窮者への支援や、雪崩や山火事などの自然災害や空襲時の救助活動に従事した。ただ、われわれは鍊成所が、南部自由地区の合計

三六万人ほどの青年を対象としたにすぎないことを忘れてはならないであろう。青年運動は自由地区に限られたのである。その自由地区の運動も、まったく自由には展開できなかった。たとえば占領軍当局は、戦闘的なナショナルリズムの噴出を恐れて、一九四一年にヴィシーの青年キャンプでの国旗掲揚を禁止したことがあった。⁽⁷⁷⁾

秘密軍事組織という位置づけも、ジヨリットが検討を加えているように注意が必要である。⁽⁷⁸⁾よく引用されるのは、ヴェガン将軍が、デュ・テイユにドイツに気づかれないように密かに軍隊を作れと述べたという話と、一九四一年始めには、ペタンもデュ・テイユに軍隊を作るように語ったという話である。⁽⁷⁹⁾しかし、ヴェガンもペタンも、どこまで本気で考えていたのかは不明であるし、先述の連合軍の北アフリカ上陸時のデュ・テイユの対応にみられるように、彼の立場は「抵抗」ではなかった。鍊成所は、何よりも青少年の厚生補導や国民革命のリーダー育成という非軍事的側面が第一義的であった。

鍊成所の精神は、基本的にはペタン主義ないし元帥主義として一括できるものであった。それは、ペタンが折に触れて発した言葉をアンソロジーとして編纂した宣伝用パンフレットに明らかである。「労働」や「服従」、「相互扶助」や「無私」、それに「新秩序」や「諸君のなかに仲間精神を磨け」といった、デュ・テイユが鍊成所の隊員に述べたのと同じ言葉をそこに読むことができる。⁽⁸⁰⁾キャンプ地には、元帥の肖像やヴィシー体制のシンボルを花や木や石で型どった「フランクの斧」があふれた。⁽⁸¹⁾鍊成所は何よりも国民革命の伝動ベルトであった。したがって、鍊成所は反民主主義であり反議会主義の傾向が強かった。

鍊成所に対する大きな非難の一つは、その教育的精神にある。⁽⁸²⁾その精神は、保守的道德であることは言うまでもないが、さらに青年の人間形成の概念、とりわけ厭世的で権威的で個人主義の破壊に向かう概念として理解された。デュ・テイユも、物質主義がエゴイズムや享楽の精神と冒険の嫌悪などをフランス青年のなかに発達させ、他方で奉

仕の観念や規律を無縁で絶えがたいものにしたことを嘆いた。錬成所の擁護者は必ず、オーヴェルニュにある指導者養成学校の教育方法を賞賛する。その肉体訓練は厳しくて、知的育成は最小限しか許されなかった。そこでは団体責任が教えられ、個人主義との戦いが押し進められた。集団生活の拘束には、従わねばならないというのである。

しかし、デュ・テイユは錬成所の教義を策定しようとはしなかった。ボーイ・スカウト運動以上のものを考案しなかった。ヴィシーの近くに幹部学校を作る考えがあり、教義の探究と世界の大問題についての情報提供の役割が期待された。しかし錬成所が、総本部の近くに指導者養成学校を建てることを望んだので、幹部学校はド・スゴンザックに任せられ、錬成所とは無関係の組織となった⁽⁸⁾。

実際には、錬成所に集まった青年はただ義務とされたから来ただけであり、確信も持っていなかった。ドイツへ働きに行かされるよりは、錬成所のほうがましであった。青年たちはそこで時には矛盾する義務に悩まされた。彼らの無気力な態度は、錬成所の曖昧さや状況の不確実さへの自然の反応であった。青年錬成所の曖昧さは、ヴィシー体制の曖昧さでもあった。しかし錬成所の生活は、次の点で意味がなくもなかった。ここでは、連帯や相互扶助の感情が刻印されたことである。班の生活で必要であったことは言うまでもないが、錬成所OB会でも機能したのである。

もともと、これらの事柄は二次的であり、本質的なことは錬成所が戦争で演じた役割である。彼らはフランス解放のために努力をしたのであろうか。愛国的な錬成所の教育が青年をレジスタンスに加わらせたという当事者の主張とは裏腹に、一九四二年一月までは、解放のために働く諸勢力は錬成所内ではよく思われてはいなかった。錬成所では元帥と国民革命への崇拜が支配的であった。指導者の大半は元帥への服従と忠誠の態度を保持した。錬成所は反ドイツ的であったが、それは全体的な世論の反映でもあった。デュ・テイユと錬成所指導層の抵抗は勇氣や巧妙さを要したが、この抵抗は錬成所内部に留まることが切望された。なぜなら、錬成所ではレジスタンスにつねに疑問が示さ

れ、ゴースムとの関係は認められなかったからである。イデオロギー的理由からも鍊成所は、ドイツの意思に反対しつつもレジスタンスに対して距離をおいた。それは一九四二年一月に、デュ・テイユが元帥への服従の道を選択したときに明らかであった。一九四三年から鍊成所内にもレジスタンスに参加する青年が増えるが、それは個人的行動であつて、鍊成所の組織的抵抗ではなかつた。

鍊成所の幹部には国民革命に熱狂する元軍人が多かつたが、ヴィシーが考えたような国民革命を支えるリーダー育成という、もくろみは成功したとはいいがたい。鍊成所を体験した青年にとつても、食糧や物資の不足ゆえに不愉快な八カ月であつた。ヴィシーは、戦時という占領下で、鍊成所の人間形成といった平時の政策が成功するといかにして樂觀しえたのであろうか。ドイツ占領軍をまえにして、国民革命の実現すら、つねにたががはめられていた。ヴィシーのレーゾン・デートル自体が、ドイツのコントロール下にあつた。

結局、鍊成所は、戦争と占領がフランス人から夢や未来を奪つた時代において、失望から生まれた夢であり、時代錯誤(anachronisme)で古めかしい(archaïsme)冒険であつた。それでもヴィシーは、青少年政策を政治課題として初めて本格的に掲げた政体であつたと言つてよいであろう。もちろん、ブルム人民戦線内閣がユースホステルや林間学校や臨海学校などの先鞭をつけてはいたし、ヴィシーの青少年政策は、男性中心の青少年に関する上からの政策であつて、青少年のための政策、青少年の意見を取り入れて行かう民主的な政策、青少年が自ら担う下からの政策でなかつたことは明らかであつた。

(一) レジスタンスとコラボラシオンが錯綜したヴィシー期の全体像については、渡辺和行『ナチ占領下のフランス』講談社、一九九四年。よりコンパクトには、柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦編『世界歴史大系 フランス史3』山川出版社、一九九五年、第

七章「引き裂かれたフランス」を参照されたい。

- (2) 青少年庁の任務は、若人の訓練と公民性のための義務的プログラムを承認し、青年運動を統制し視察し助成金を交付することであった。初代の家族・青少年庁長官は政治家のイバルネグレーであったが、一九四〇年九月の内閣改造後、青少年庁として独立し、技師のジュールジュ・ラミランが長官を引き継いだ。青少年庁は、このときから国民教育省の管轄下に置かれ、四〇年一月からは総理府の所管に、四一年一月からは国民教育省に再統合された。André Basdevant. *Les services de jeunesse pendant l'occupation. Revue d'histoire de la deuxième guerre mondiale*, no. 56, octobre 1964, pp. 65-66.
- (3) Georges Lamirand, Georges Pelorson, Yves de Verdilhac. *France nouvelle, à nous, Jeunes! Vers l'unité*, Paris, 1942, p. 7, p. 11.
- (4) Philippe Pétaïn. *Discours aux Français*, Paris, 1989, pp. 104-106. このペタンのラジオ演説は、多少の文言の異同はあるが青少年庁発行の写真入り宣伝冊子「Secrétariat général de la Jeunesse, *Jeunes de France*, Paris, 1942, pp. 1-2.」にも再録された。
- (5) Secrétariat général de la Jeunesse, *France nouvelle, à nous, Jeunes!*, Paris, 1942.
- (6) Alfred Fabre-Luce, *Journal de la France 1939-1944*, Paris, 1969, p. 393.
- (7) 八四歳のペタンはその例外と位置づけられていた。ジャン・コクトーが、「元帥は大衆が慣れ親しんでいた君主のイメージに近かった。それにフランスでは高齢はひとを安心させる。彼は瘰癧を癒しかねなかった」と記しているように、「ヴェルダンの英雄」たるペタンは、老人の英知や経験というプラスの面で捉えられたのである（ジャン・コクトー『占領下日記Ⅲ』秋山和夫訳、筑摩書房、一九九三年、一三七ページ）。
- (8) ダニエル・ゲラン『褐色のペスト』（栖原弥生訳）河出書房新社、一九七二年、二一九ページ。
- (9) 比較ファシズム的視点について一言したい。たしかに、ナチズムの疑似革命性、ダイナミズムは、ヒトラー・ユーゲントと突撃隊SAの活動に負っている。しかしフランスには、ヒトラー・ユーゲントのような一元化された単一の青年運動や政党はついに存在しなかった。本稿でも若干触れるように、コラボラシオニストと呼ばれる対独協力主義者を中心にそのような動きはあったものの、内部に意見の対立もあって実現を見なかった。一元的な組織の誕生は、「体制としてのファシズム」のメルクマールとされたものである。それがヴィシーにはなかった。したがって、ヴィシー体制について研究が進めば進むほど、ヴィシーはファシズムではなかったという通説が力を得てくる。そこで筆者は、もう少し広い枠組みで見ればどうかということを考えている。萌芽的な段階であるが、それを今少し述べよう。

それは青年運動の共時性、青年運動のサンクロナックな性格、社会の青年期への注目という視点である。ロシア革命後のソ連には、コムソモールという共産主義青年同盟という組織があったし、ドイツにはヒトラー・ユーゲント、イタリアには青年ファッシが組織された。このようななかに、ヴィシーの青年運動も位置づけうるのではないか。しかし、この視点は安直な全体主義論にのつかったものではない。もう少し広いバースペクティブから検討するつもりである。

一九世紀の最後の四半世紀に、ワグナーフォーゲル運動やスカウト運動が興隆したことはつとに知られている。さらにフロイトの心理学や精神分析の誕生、エディプス・コンプレックスの発見、徴兵制の実施による青年期への関心の増大、若さを中心的な価値とし老いを忌避した初の世代である「一九一四年の世代」の登場、フランスのアガトンによる「今日の若者」（一九一三年）など、こういった社会文化状況と突き合わせてみると、一九世紀末から二〇世紀前半の社会における「青年の誕生」という社会的なコンテキストが浮かびあがってくる。このコンテキストのなかで「青年」というテキストは織りあげられ、時代のテキストチャーとなるのである。このような視点で、青年運動と政治との関係を分析するのも興味深いと思われる。

つまり、青年は若さや生命力にあふれた「春」のメタファーとして、シンボルとして利用された。とくに青年は、革命や体制変革などの「政治革命」後の国家建設の担い手として期待された。それ以前の社会は、旧体制とか老人支配の国と非難された。そして、新しい社会の幹部養成というプログラムのなかに青年が動員された。ソ連もドイツもフランスも、そのような共通点がある。ピックアップできるはずである。このような視座は、ミシェル・ペローが「二〇世紀の青年」という『社会運動』誌の特集のなかで、「若者の歴史は今日飛躍的に発達した領野である」と述べた問題意識とも重なるだろう（Michelle Perrot, *Le printemps des adolescents. Mouvement social*, no. 168, 1994, p. 3. 「一九一四年の世代」については Robert Wohl, *The Generation of 1914*, Cambridge, 1979. 復刻されたアガトンについては Agathon, *Les jeunes gens d'aujourd'hui*, Imprimerie Nationale, 1995. 日英の青少年運動については、田中治彦『ボーイスカウト』中公新書、一九九五年）。

- (10) Pétain, *op. cit.*, p. 60. 翌年の七月八日にもペタンは、「過失、誤謬、幻想、エゴイズム、無能の集積の結果が破局である」と語った (*Ibid.*, p. 151.)。
- (11) Pierre Giolitto, *Histoire de la jeunesse sous Vichy*, Paris, 1991, pp. 41-42.
- (12) W. D. Halls, *Politics, Society and Christianity in Vichy France*, Oxford, 1995, p. 269. 一八八六年生まれのアンリ・マニスも「一九一四年の世代」である。
- (13) Henri Amouroux, *Quarante millions de pétainistes*, Paris, 1988, p. 355; Halls, *op. cit.*, p. 276; Giolitto, *op. cit.*, pp. 40, 43-47.

- (14) Pétain, *op. cit.*, pp. 72-77. 青年問題以外では、国民の糧食の確保や避難民の帰国、戦争捕虜の運命、復員兵の雇用などの問題が緊急に解決を必要とするものと述べている。
- (15) *Ibid.*, pp. 267-269.
- (16) Paul Baudouin, *Neuf mois au gouvernement avril-décembre 1940*, Paris, 1948, p. 400.
- (17) 以上、Halls, *op. cit.*, p. 278, p. 280, p. 281.
- (18) Bernard Comte, Les organisations de jeunesse, in J.-P. Azéma et F. Bédarida dir., *Le régime de Vichy et les Français*, Paris, 1992, p. 411. 本論文は、青年運動の見取り図を得るのに便利である。
- (19) Halls, *op. cit.*, pp. 279-281; Aline Coutrot, Quelques aspects de la politique de la jeunesse, in Colloque, *Le gouvernement de vichy 1940-1942*, Paris, 1972, p. 281. 本論文も、新旧の青年運動の概観を得るのに有益である。
- (20) 以上、Comte, *op. cit.*, p. 418; Pétain, *op. cit.*, pp. 233-237.
- (21) W. D. Halls, *The Youth of Vichy France*, Oxford, 1981, p. 345; Armand Cosson, Etude départementale, les mouvements de jeunesse dans le Gard, in J.-P. Azéma et F. Bédarida dir., *op. cit.*, p. 429. 「国民の仲間」は南北両地区にあつたが、とくに北部占領地区が中心であつた。この事実にはドイツ寄りの姿勢を窺うことができる。解放後、「国民の仲間」は青年市民奉仕隊 Service civique de la jeunesse となる (Basdevant, *op. cit.*, p. 83.)。
- (22) Coutrot, *op. cit.*, p. 275. 一九四二年二月から六月まで青少年庁次官を務めたのは、ポール・マセである (Basdevant, *op. cit.*, p. 67; Bernard Comte, *Une utopie combattante*, Paris, 1991, p. 498.)。
- (23) 本論文の初出は、一八九一年の『両世界評論』である。これを紹介した文献に、田中正人「第三共和政初期の兵制改革と将校の役割」『愛知県立大学外国語学部紀要』(地域研究・関連諸科学編) 第二四号、一九九二年、六二一―六四ページ。
- (24) 以上、Halls, *Politics, Society and Christianity in Vichy France*, p. 272. なおラシランは、一九三九年に「社会の仲間」(Equipes Sociales)の副会長になっていた。この組織は、青年労働者と学生との「文化的出会い」を促す民衆文化の振興を目的としていた (Laurent Gervereau et Denis Peschanski dir., *La propagande sous vichy 1940-1944*, Paris, 1990, p. 43.)。
- (25) 青年錬成所については、W. D. Halls, *The Youth of Vichy France*, pp. 284-307; Raymond Josse, *Les Chantiers de la Jeunesse, Revue d'histoire de la deuxième guerre mondiale*, no. 56, 1964; Giolitto, *op. cit.*, pp. 548-609.
- (26) Commissaire Général de la Porte du Theil, *Les Chantiers de la jeunesse*, Toulouse, 21 novembre 1941, pp. 9-13.

- (27) ボードウアンボードウアンの回想記にも言及はない。Paul Baudouin, *Neuf mois au gouvernement, avril-décembre 1940*, Paris, 1948.
- (28) ド・ラットルド・ラットル・ド・タッシニード・タッシニー將軍もそのような一人である。ド・タッシニード・タッシニー將軍は、休戦後、クレルモンクレルモン・フェランフェラン近郊に労働キャンプを設置し、一〇〇人ほどの一九四〇年兵と逃げてきた戦争捕虜、ストラスブルストラスブル大学生や彼の第一四歩兵連隊の兵を集めた。村の再建をしたり、スポーツと体育と將軍との歓談等をつうじて、さまざまな出身の青年にともに働きともに遊ぶ機会を与えていた。これが錬成所のモデルとなる。しかしド・タッシニード・タッシニーの性格ゆえに、錬成所の課題はデュ・ティユデュ・ティユに任された。ド・タッシニード・タッシニーは、ドイツ軍の全土占領の頃、ドイツへの抵抗で収監されるが、その後逃走して解放軍とともにフランスに帰国する。Halls, *The Youth of Vichy France*, pp. 284-285; Giolitto, *op. cit.*, p. 549.
- (29) *Les Chantiers de la Jeunesse*, Rio de Janeiro, 1941, p. 12.
- (30) *Ibid.*, p. 38.
- (31) *Josse, op. cit.*, pp. 14-17.
- (32) 組織については、de la Porte du Theil, *Les Chantiers de la jeunesse*, pp. 16-18, 28-31; *Les Chantiers de la Jeunesse*, pp. 17-30; La vie ardente de Chantiers de la Jeunesse, *Les Cahiers de la Jeune France*, no. 14, octobre 1941, pp. 73-77. 本誌は、「国民革命の機関誌」と題されていることから分かるように、ヴィシーの宣伝臭の強い雑誌である。一四号には、一九四一年八月一日のペタンの「悪しき風」メッセージも掲載されている。
- (33) de la Porte du Theil, *Les Chantiers de la jeunesse*, p. 15.
- (34) Giolitto, *op. cit.*, p. 553.
- (35) 南仏ガール県には三つのキャンプがあった。Cosson, *op. cit.*, p. 424.
- (36) 以下、*Josse, op. cit.*, pp. 17-24.
- (37) Giolitto, *op. cit.*, p. 551.
- (38) 以上、de la Porte du Theil, *Les Chantiers de la jeunesse*, pp. 19-24.
- (39) J. de La Porte du Theil, *Un an de commandement des Chantiers de la Jeunesse*, Paris, 1941, pp. 160-161.
- (40) *Ibid.*, p. 32. その後も隊付き聖職者は「精神と教育の分野で団長の助手たるべきだ」とか、「魂の補給者」と呼ばれた(*Ibid.*, p. 141, p. 154.)°
- (41) *Ibid.*, pp. 50-60.

- (42) *Ibid.*, pp. 196-198.
- (43) Pétain, *op. cit.*, p. 352.
- (44) Armand Praviel, *Le Maréchal Pétain raconté à la jeunesse de France*, Toulouse, 1941, p. 49.
- (45) Nicholas Atkin, *Church and Schools in Vichy France 1940-1944*, New York, 1991, pp. 97-101; Jean-Louis Gay-Lescot, *Sport et éducation sous Vichy 1940-1944*, Lyon, 1991. 教会によって、体操服が規制されたり女子の運動が制約を受けたりした。
- (46) de La Porte du Theil, *Un an de commandement des Chantiers de la Jeunesse*, pp. 158-170.
- (47) 戦間期の二種類の青年層については、Antoine Prost, *Jeunesse et société dans la France de l'entre-deux-guerres, Vingtième siècle*, no. 13, 1987, pp. 35-43.
- (48) 渡辺和行『ナチ占領下のフランス』前掲、九三ページ。
- (49) de la Porte du Theil, *Les Chantiers de la jeunesse*, p. 25.
- (50) Amouroux, *op. cit.*, p. 356. この日課は「フランスの仲間」と同様である。「フランスの仲間」の日課はパンクチュアルであり、六時三〇分、起床。七時一五分、朝食。七時三〇分、エベール式体育。八時、点呼。八時一五分、国旗・団旗掲揚と訓辞。八時三〇分、午前の労働。一二時一五分、昼食。一三時三〇分〜一六時三〇分、労働。一六時四五分、軽食、掃除洗濯、休憩。一七時三〇分、スポーツないし職業訓練。一八時一五分、リーダーからの話。一八時三〇分、勉強。一九時一五分、夕食。二〇時、娯楽(Halls, *The Youth of Vichy France*, p. 269)。
- (51) de La Porte du Theil, *Un an de commandement des Chantiers de la Jeunesse*, pp. 111-112, 117-118.
- (52) de la Porte du Theil, *Les Chantiers de la jeunesse*, pp. 26-27; de La Porte du Theil, *Un an de commandement des Chantiers de la Jeunesse*, pp. 193-195.
- (53) Antoine Lefebure, *Les conversations secrètes des français sous l'occupation*, Paris, 1993, p. 201; Giolitto, *op. cit.*, p. 569.
- (54) Lefebure, *op. cit.*, pp. 200-201, 204; Giolitto, *op. cit.*, p. 586.
- (55) de La Porte du Theil, *Un an de commandement des Chantiers de la Jeunesse*, p. 29, p. 36, p. 81, p. 82, p. 95.
- (56) あるキャンプのテントは地面を掘り下げて設営してあり、なかのダブルベッドの枠が潜水艦を想起させたが、布製の屋根のテントなので雨の時には、文字どおりテントが海中と化したと皮肉られた。Lefebure, *op. cit.*, p. 201.
- (57) Giolitto, *op. cit.*, pp. 559-561, 563-564.

- (58) La vie ardente de Chantiers de la Jeunesse. *op. cit.*, pp. 69-77.
- (59) Josse. *op. cit.*, p. 19.
- (60) Fabre-Luce. *op. cit.*, p. 394.
- (61) 同上. Josse. *op. cit.*, pp. 25-34.
- (62) Giolitto. *op. cit.*, p. 589.
- (63) *Ibid.*, p. 603.
- (64) *Ibid.*, pp. 596-599.
- (65) 同上. *Ibid.*, p. 593.
- (66) たとえば、シヤン・ヌータリイ大佐率いる第二二団は、一九四三年一月に解散させられた。Le colonel Jean Noutary et le Groupement 21 des Chantiers de la Jeunesse. Arcueil, 1991, p. 236.
- (67) Giolitto. *op. cit.*, pp. 600-601.
- (68) デアは、戦後でも、ヴィシーの青年運動の試みを「子どもじみて非現実的だった」と非難している (Marcel Déat. *Mémoires politiques*, Paris, 1989, p. 621.)⁹
- (69) 同上. Amouroux. *op. cit.*, p. 357; Josse. *op. cit.*, pp. 36-37; Halls. *The Youth of Vichy France*, p. 299; Lefébure. *op. cit.*, p. 199; Giolitto. *op. cit.*, p. 594.
- (70) Halls. *The Youth of Vichy France*, p. 301.
- (71) de la Porte du Theil. *Les Chantiers de la jeunesse*, pp. 33-35; Giolitto. *op. cit.*, pp. 555-556.
- (72) de La Porte du Theil. *Un an de commandement des Chantiers de la Jeunesse*, p. 105, p. 126.
- (73) Halls. *The Youth of Vichy France*, p. 296.
- (74) Josse. *op. cit.*, pp. 34-36.
- (75) デュ・テイユは一九四五年五月四日にチロルで解放され、特別裁判所に召喚されたが、レジスタンスを支持したことが認められ、一九四七年二月十八日に対独協力罪を免れた。彼は一九七六年に九二歳で世を去った。Giolitto. *op. cit.*, p. 605.
- (76) *Ibid.*, p. 602.
- (77) Atkin. *op. cit.*, pp. 85-86.

- (78) Giolitto, *op. cit.*, pp. 606-607.
- (79) Amouroux, *op. cit.*, p. 363.
- (80) *A la Jeunesse de France et de l'empire français*, s. d., p. 11, p. 14, p. 23.
- (81) Giolitto, *op. cit.*, p. 584.
- (82) Josse, *op. cit.*, pp. 37-42.
- (83) この学校がユリアージュである。ユリアージュ幹部学校については、一九九五年度の日本政治学会で、平野千果子氏（鈴鹿国際大学）による報告「ユリアージュドイツ占領下フランスの国立幹部学校、右でもなく左でもなく」があったことを記しておく。関連報告に、剣持久木氏（学術振興会特別研究員）の「ヴィシー派知識人の形成——ティエリー・モーニエと国民革命——」があった。

付 記

本稿は、一九九五年一〇月に法政大学で開催された日本政治学会研究大会の分科会E「ナチスに協力したフランス—ヴィシー—体制論試論—」における筆者の報告「ヴィシーと青年運動」にもとづくものである。発表の場を与えていただいた諸先生、および貴重なご意見を賜ることができた会員諸氏にお礼を申し上げたい。なお、本研究について香川大学法学部より平成七年度研究助成金を得た。記して謝意を表したい。